

現代日本における青少年の進路選択
 ——中学・高校生を対象としたパネルデータ分析から——
 Adolescent Career Choice in Contemporary Japan:
 Analysis from Panel Data of Junior High School and High School
 Students

中西 啓喜
 NAKANISHI Hiroki

This paper attempts to clarify the actual state of Japanese tracking system by analyzing the panel data of a follow-up survey on junior high school and high school students. Previous tracking study has accumulated by analyzing the aspiration of only high school students. Thus there is a probability that the tracking effect has been overestimated because aspiration of junior high school has not been statistically controlled. The analysis provides the following points: 1) Aspiration of junior high school has the unique effect to warm up that of high school. 2) The track of a high school student does not concern with their aspiration of junior high school.

1. 問題設定

本稿では、中学・高校生を追跡的に調査したパネルデータの分析により、現代日本の青少年の進路選択のメカニズムを明らかにすることを目的としている。

教育を通じた社会移動は、社会学の伝統的なテーマのひとつである。教育は経済効率と社会正義の両方を存立させることができる「特効薬」として期待されてきた。しかし、理想に反して実態としては、教育が社会階層を縮小するどころか、拡大ないし再生産していることも指摘されてきた (Lauder et al. eds. 2006=2012)。教育社会学者の多くは、不平等をもたらす教育について研究を重ね、教育システムが不平等を作り出す装置のひとつとして「トラッキング」に注目してきた (Rosembaum 1976; Oakes 1985 など)。

トラックとは陸上競技の走路のことだが、Rosembaum (1976) はこれをアメリカの能力別学級編成の名称に転用し、「トラッキング」として概念化した。すなわち、トラッキングとは生徒の学力やアスピレーションによって学校ないし学級編成を同質化し、生徒の進路選択を水路づける教育システムだと定義される。

トラッキングの主たる機能のひとつは、各トラックに配分された生徒には、所属トラックにふさわしい社会化が行われるということである。進学用トラック (academic track) に配分された生徒には洗練された知識の学習やアスピレーションが加熱される。他方で、非進学用トラック (general track, vocational track) の生徒は、徐々に大学へ進学できないことや、自身が下位トラックの生徒であることを受け入れるほかにないよう冷却されるという

具合に、トラックに応じた進路を選択するように社会化されるのである。それゆえ、トラック研究の主眼は、教育システムが社会階層に従属して不平等を再生産するという葛藤論的な視点 (Collins 1979=1984) だけではなく、教育システムそのものが独立してトラック参入以前の社会階層格差を反映して進路選択を制限するメカニズムを指摘することになったといえよう (Oakes 1985; Lucas 2001 など)。

一方で、日本の教育社会学では、トラックは階層化された高校格差構造を意味することが多い。藤田は、日本的な高校格差構造をトラックシステムとして、「たとえば複線型の学校システムのように法制的に生徒の進路を限定するということはないにしても、実質的にはどのコース (学校) に入るかによってその後の進路選択の機会と範囲が限定される」(藤田 1980: 118) と定義した。このような特徴を持つ日本型トラックは、以下の2点において青少年の進路選択を制限していると整理することができる。

第一に、高校内部で高校生の進路を分化させているという視点である (松原他 1980; Cicourel and Kitsuse 1963=1985; 中村 2010 など)。この研究の文脈では、フォーマル/インフォーマルな学校経営・教育指導が、高校生の学校生活を形成し、それによって彼ら・彼女らの進路選択が水路づけられていくということになる。第二の視点は、高校階層構造の存在が、高校よりも下の学校・生徒に与えるインパクトである (学校社会学研究会 1983; 苅谷 1986)。こちらの視点からは、高校受験を控えた中学生は、高校入学以前 (中学3年次) の学力ないし成績から入学できる高校ランク・タイプ (トラック) を予測し、各トラックへの入学可能性によって高校卒業後の進路選択が予期的に社会化されているということになる。

これらのメカニズムについては、高校入学以前/以後を問わず、高校階層構造が青少年の進路選択に及ぼす影響として、総じて「トラック効果」と呼ぶこともできるかもしれない。しかし、前者の研究では、進路分化がトラック機能によるものではなく、トラック参入前に繰り上げられた学力選抜や進路形成をそのまま反映しているという可能性が残されたままである。他方、後者の研究では、高校入学前に形成されていた希望進路が、高校入学後にトラック機能によって変化するかどうかは不明である。それゆえ、竹内 (1995: 17-18) が、Meyer (1986) を引きながら、(教育) 社会学者は「学校効果」をしばしば過大に評価するため、「学校効果」が神話であることを見抜けないと指摘したように、従来のトラック研究は、トラックが持つ進路分化機能を過大に評価してきた可能性がある。

以上のような課題を明らかにするためには、中学生と高校生を追跡的に調査したパネルデータが必要となる。パネルデータを用いることのメリットはいくつかある。まず、①「データの精度の高さ」にある。例えば、一回の社会調査で、過去の情報 (例えば、過去の希望進路) を回顧的に尋ねることによってもデータは得られるが、精度の点でパネルデータの方が優れている。さらに、パネルデータは、②正確な因果関係を想定できることや、③個人レベルでの意識・行動の時系列的な変化を明らかにできるなどのメリットがある (山口 2004; 北村 2005)。

以上より、本稿では、高校入学以前の希望進路がトラックにより変化するか否かを、中学生と高校生を追跡調査して得られたパネルデータの分析から明らかにしていく。

2. 青少年のアスピレーション研究のレビュー

教育社会学では、青少年の進路選択を「アスピレーションの加熱／冷却」という枠組みで説明してきた。「アスピレーション」とは、社会的資源（富、勢力、威信、知識・技能）の獲得を目指した意欲を意味する。「加熱」はこれら社会的資源の獲得を目指して人々が動機づけられるプロセスであり、「冷却」はアスピレーションを各々分相応に適切な水準まで切り下げられるプロセスのことである（天野 1982: 7-12）。学校教育は、アスピレーションの加熱／冷却の両側面を担い、その中心的な教育システムとしてトラッキング（＝高校）が位置づけられてきた（岩木・耳塚編 1983）。

日本型トラッキングシステムの特徴を中心としてアスピレーションの長期的な加熱／冷却の経緯を調べたものに荻谷（1983）の研究がある。荻谷が指摘したのは、①進学率の高い普通科高校に所属する生徒は小学校低学年といった早い時期から大学進学を希望し、反対に職業系専門高校に所属する生徒は早い時期から大学進学しないことを決めていること（高校入学以前の効果）、②高校入学後には、希望進路が「未定」だった生徒が、高校内部でのインフォーマルな教育活動によって、所属するトラックにふさわしいアスピレーションを持つようになること（入学以後の効果）、の2点である。これらは、高校生を対象として回顧的に小学生・中学生時点での希望学歴を尋ねたデータにより、アスピレーションの推移のパターンを高校入学前後で明らかにすることで、トラッキング効果の存在を示している。

中学生と高校生のアスピレーションの変化をパネルデータの分析によって明らかにしたものに、耳塚（1986）や藤原（2010）がある。これらの研究の知見は、いずれもアスピレーションの変化を「学業成績の変化」と結びつけたところに特徴がある。

耳塚（1986）は、中学生を対象としたパネルデータを分析し、成績の自己評価の上昇／下降によって生徒のアスピレーションは加熱／冷却されるということを示した。中学生のアスピレーションの変化は、生徒集団内部での学業成績の位置を反映しながら進路意識を形成するというのである。

ところが、高校生を3年間追跡的に調査したパネルデータを分析した藤原（2010）は、耳塚（1986）とは異なる知見を見出している。すなわち、高校生のアスピレーションは、成績の自己評価の上昇により加熱されるが、成績が下降しても冷却はされないという。この結果に対し、推薦・AO入試など学力選抜を課さない大学入試選抜制度が普及した近年では、成績による主観的な自己選抜が作動しにくくなっている、と藤原（2010）は考察を加えている。

加えて、トラッキング研究を社会移動ないし教育達成の文脈に位置づけるのならば、生徒の出身社会階層も重要なファクターである。そこでの主たる関心は、①出身社会階層とトラックがどの程度独立的であるか（潮木他 1978; 藤原 2012 など）、②トラック内での進路選択がどの程度出身社会階層から独立的であるか（耳塚 2000 など）であり、実際にトラッキングを通じた社会階層再生産の様相も明らかにされてきた（中西他 1997 など）。

このように先行研究をレビューすると、青少年の進路選択の変化をとらえる視点として重要なのは、①トラック参入以前・以後での希望進路、②学業成績の自己評価、③出身社会階層の3点に整理することができる。

中村 (2002) は、日本型教育システムの特徴を「加熱進行一階層維持システム」と呼び、社会階層ごとに予め分化している希望進路の差異が教育システム内部で、分相応に徐々に加熱されると指摘する。しかし、以上の研究は本稿にとって示唆的ではあるものの、高校生の希望進路の変化を回顧的に回答してもらい得たデータや中学生と高校生を別々に追跡調査したデータを用いている。そのため、トラッキングシステムが中学時点のアスピレーションを変容させているのか、それとも高校教育がアスピレーションをバイパスしているにすぎないのかが明確にされてこなかった。そこで本稿では、中学3年生と高校3年生を対象に追跡調査して得られたデータを分析することで、日本型トラッキングシステムを検証していく。

3. 調査方法とデータの概要

(1) 調査方法とデータの回収・接続状況

本稿では、お茶の水女子大学が実施している「青少年期から成人期への移行についての追跡的研究」(代表：耳塚寛明)のデータを用いる。データは、以下のような手続きで収集されたものの一部である。

調査地域は、人口約9万人の東北地方A市である。調査の実施に際して、調査対象の県および市の教育委員会に協力を仰ぎ、A市の中学校、高校に在籍する生徒に対して悉皆調査を行った。当該地域は、通学可能な範囲に私立中学校が皆無のため、A市内の中学生に対して全員に調査を実施しているところにもこの調査の特徴がある。

本稿で用いるデータの原点調査は、2007年に中学3年生への質問紙調査とともに、その保護者に対しても質問紙調査を実施した。そしてその3年後(2010年)に第二波調査を当該地域にある6つの高校の3年生に質問紙調査を実施した。調査の時期は各年度の11月頃である。

調査の方法は、生徒に対する調査は学校での集団自記式(記名式)で回答してもらい、調査校で担当した教員が配布・回収し、調査の主体が委託する調査会社へ郵送してもらった。保護者調査は、生徒が保護者調査票を自宅に持ち帰り、回答した保護者自身が回答済み調査票を調査会社へ郵送するという方法をとった。つまり、同一のコーホートに対して教育委員会と学校を通じて、3年間で2度の記名式の調査を行い、委託する調査会社で2つの生徒調査票と保護者調査票をマッチさせてデータを構築しているということである。

表1にはデータの回収・接続状況を示した。2007年の中学3年生およびその保護者への調査の回収率は、それぞれ79.7%、78.7%であり、生徒—保護者票の接続率は97.5%である。そして2010年に同一の調査フィールドで高校3年生を調査し、接続可能な生徒の人数は539人であり、892人を基数とすると60.4%の生徒を追跡できたことになる。サンプルサイズが決して大きくないため、このデータから得られる結果が、日本社会全体を反映してはいないことには注意を払う必要がある。とはいえ、このデータを分析することにより、トラッキング仮説の検証を精度が高いデータで可能となる。

想定される標本の脱落の理由もここで述べておこう。調査当時、A市に立地する公立高校は6校であるため、その生徒には全員に質問紙調査を行っている。しかし、A市内および近隣の市町村には通学可能な公立高校および私立高校が複数存在している。そのため脱

落の理由は、①調査票に無記名・無回答だった、②調査当日に欠席した、③3年間で引越した、④6校以外の高校へ進学した、のいずれかになる。なお、他にも通学可能な高校はあるが、A市の小中学生にとって、調査した6つの公立高校が多数派の進路ではあることは明記しておく。

表1. データの回収・接続状況

	配布数	回答数	回収率		接続可能1	接続可能2
中3生徒調査票	1148	915	79.7%	⇒	892	539
中3保護者調査票	1148	903	78.7%		97.5% (892÷915)	
高3生徒調査票	923	898	97.3%		60.4% (539÷892)	

注) 接続可能1: 中3生徒—中3保護者

(JELS)

接続可能2: 中3生徒—中3保護者—高3生徒

(2) サンプルの脱落について

パネル調査は標本の脱落 (sample attrition) が不可避であり、追跡可能な分析対象者に極端な脱落の傾向が見られるかどうかを検討する必要がある (北村 2005)。そこで、ここでは脱落サンプルの傾向を確認しよう。

紙幅の都合で表は割愛するが、脱落サンプルと追跡可能者の性別、中学3年次の成績の自己評価、父学歴を比較した (変数の詳細は後述する)。

性別は、脱落サンプルの男子 53.5%だが、追跡者では 46.4%であり、女子の方が追跡できている。

次に、中3次成績の自己評価を比較すると、「下の方」と答えた脱落サンプルは 23.1%いたが、追跡者は 9.3%に減少している。反対に、「上の方」と回答した脱落サンプルは 7.2%だが、追跡者は 15.9%となっている。よって、追跡できたサンプルは、相対的に中3時点での成績が高かった生徒だと考えられる。

さらに、父学歴を確認すると、脱落サンプルでは「中学・高校卒」と回答したのが 50.1%だが、追跡者では 44.7%と父学歴が中学・高校卒の層が減少している。一方で、「短大・専各卒」および「大学卒」と回答した層は 6.2%→11.3% (短大・専各卒)、19.3%→23.4% (大学卒) と増加している。つまり、比較的父親が高学歴層を追跡サンプルとして回収できていることがわかる⁽¹⁾。

本稿で用いるデータは、以上の傾向があることを把握したうえで、以下の分析を展開していくことになる。

(3) 分析に用いる変数

分析に用いる変数およびその基本的な情報は表2に示した。まず、分析対象者は、表2に示した全ての質問項目に回答した生徒のみである (N=517)。ただし、保護者調査から得られた父親の学歴は無回答が多かったため、「学歴不明」として分析対象者に含めることとする。

性別は、女子を基準カテゴリーに設定した「男子ダミー」を用いる。

生徒の出身社会階層の指標には、保護者調査票から得られた父学歴を用いる。「中学・高校卒」、「短大・専各卒」、「大学卒」、「学歴不明」の4つのカテゴリーを用いる⁽²⁾。

成績の自己評価は、「あなたの学校での成績は、学年の中でだいたいどのくらいですか」

という質問項目に対し、「上の方」(=5) から「下の方」(=1) までの5件法で回答してもらった成績の自己評価を連続変数として用いる。

アスピレーションの指標には、「あなたは、将来どのくらいまで勉強したいと思っていますか」という質問に対する回答を用いる。変数名は「希望最終学歴」で、この変数は、「大学希望」(大学・大学院)と「非大学希望」(中学、高校、短大・専各、未定、無回答)の2つのカテゴリー化する。中学3年次には、希望最終学歴が未定や無回答だった生徒が少なくない。全て欠損値に設定する場合もあるが、分析ケースの確保のために未定・無回答だった生徒を「積極的に大学進学を希望していない層」として「非大学希望」に割り振った。

所属トラックは、調査対象の6つの高校のうち、商業高校と工業高校を「専門校」とし、4つの普通科高校を進路実績から「進学校」、「普通の普通科高校」(変数名は「普通科校」)に分け、3つのカテゴリーのトラックを変数として作成した⁽³⁾。

(4) 分析の手順と方法

分析は2つのパートに分かれる。第一の分析では、中学3年次の希望最終学歴と成績に着目することで、その後は実際にどのトラックに所属したかを明らかにし、次の分析の準備をする。方法は、「進学校の所属=1、その他の高校に所属=0」を従属変数に設定したロジスティック回帰分析を用いる。

第二の分析では、高校3年次の希望最終学歴の規定要因を明らかにする。方法は、「大学希望=1、その他の希望進路=0」を従属変数に設定したロジスティック回帰分析を用いる。仮に、所属トラックをコントロールしても、中3次の希望最終学歴や成績が統計的に有意ならば、中3次の要因がトラッキングシステムとは独立した効果を持つことになる。反対に、中3次の要因を統制しても所属トラックが有意ならば、トラッキングシステムがトラック参入以前の要因とは独立した機能を持つといえる。本稿では、これらの変数間の因果関係をパネルデータの分析によって明らかにしていく。

表2. 使用する変数の概要 (N=517)

性別		
女子	54.0	
男子	46.0	
父学歴		
中学・高校卒	44.2	
専門学校・各種学校卒	11.5	
大学卒	23.5	
学歴不明	20.8	
所属トラック		
進学校	36.3	
普通科校	24.6	
専門校	39.0	
成績の自己評価		
	中3次	高3次
上のほう	15.8	18.0
真ん中より上	28.5	18.2
真ん中	24.0	26.1
真ん中より下	22.3	27.3
下のほう	9.4	10.4
希望最終学歴		
	中3次	高3次
未定	11.0	4.1
中学校	0.4	—
高校	22.4	32.5
専門学校・各種学校	14.7	14.1
短期大学・高専	4.8	4.8
大学	44.7	39.8
大学院	1.9	4.6

(JELS)

4. 分析

(1) 所属トラックの規定要因

ここでは、中学3年次の希望最終学歴と成績に着目しながら、所属トラックの規定要因

を明らかにする。表3は、進学校=1、その他の高校=0を従属変数に設定したロジスティック回帰分析の結果である⁽⁴⁾。

Model1は、性別と父学歴のみで進学校の所属を予測したモデルである。有意な変数は、父親の大卒学歴であり、Exp(B)からは、父学歴が中学・高校卒との対比において、大卒である生徒ほど約8.0倍進学校に所属する確率のオッズが高まることを意味している。父学歴が高い(=出身社会階層が高い)生徒ほどアカデミックなトラックに在籍するというのは、いくつかの先行研究(Oakes 1985; Lucas 2001など)と整合的な知見である。

Model2は、Model1に中3次の希望最終学歴を加えたモデルである。変数は0.1%水準で統計的に有意であり、中3次に大学・大学院までの進学を希望している生徒ほど進学校に所属していることがわかる。

Model3は、Model1に中3次成績を加えたモデルである。投入した変数は0.1%水準で有意であり、中3次の成績が高いほど進学校に所属しているといえる⁽⁵⁾。

Model1に中3次の希望最終学歴と成績の両方を投入したのがModel4である。この結果から、希望最終学歴と成績のいずれも0.1%水準で有意であり、進学校に所属するのは、中3次に大学・大学院への進学を希望しており、かつ成績が高い生徒であることがわかる。

次に、擬似決定係数(Nagelkerke R2)のモデル間の変化を確認しよう。モデル間の差が有意かどうかは、尤度比検定を行い表中に示している。中3次希望最終学歴を投入したModel2は、Model1と比べるとNagelkerke R2が0.148増加している。一方で、中3次成績を投入したModel3は、Model1と比べるとNagelkerke R2が0.421と大きく増加している。さらに、両変数を投入したModel4の擬似決定係数をModel3のそれと比較すると、その変化は0.041の増加に留まる。これらの擬似決定係数の変化から、所属トラックを最も説明している要因は、中学3年次の成績であるといえる。

表3. 所属トラックの規定要因(進学校=1としたロジスティック回帰分析)

	Model1		Model2		Model3		Model4	
	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)
性別 (ref:女子)								
男子	-0.090	0.914	-0.341	0.711	-0.560	0.571 *	-0.780	0.458 **
父学歴 (ref:中学・高校卒)								
短大・専各卒	0.581	1.787	0.525	1.691	0.665	1.944	0.583	1.792
大学卒	2.083	8.025 ***	1.611	5.010 ***	2.158	8.653 ***	1.766	5.849 ***
学歴不明	0.130	1.139	0.190	1.209	0.550	1.734	0.536	1.709
中3次希望最終学歴 (ref:非大学希望)								
大学希望	—	—	1.818	6.157 ***	—	—	1.518	4.564 ***
中3次成績	—	—	—	—	1.900	6.687 ***	1.875	6.520 ***
定数	-1.163	0.313 ***	-1.904	0.149 ***	-7.707	0.000 ***	-8.223	0.000 ***
-2 対数尤度	593.600		523.541		362.096		332.953	
χ^2 (d.f.)	83.041 (4) ***		153.100 (5) ***		314.544 (5) ***		343.688 (6) ***	
Nagelkerke R2	0.203		0.351		0.624		0.665	
尤度比検定	—		M1 vs. M2 ***		M1 vs. M3 ***		M3 vs. M4 ***	
N	517		517		517		517	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001 (JELIS)

(2) 高校3年次希望最終学歴の規定要因

ここでは、高校3年次希望最終学歴の規定要因を分析する。表4は高校3年次の希望最終学歴が大学希望=1、それ以外=0を従属変数に設定したロジスティック回帰分析の結果である。

Model1では、性別と父学歴のみで大学希望を予測した。その結果、父学歴が中学・高校

卒との対比において、短大・専各卒の場合は約 2.3 倍 ($p<.01$)、大卒であれば約 10.5 倍 ($p<.001$)、大学進学を希望するようになる確率のオッズが上昇することがわかる。

それでは、高 3 次の大学希望を中学 3 年次要因 (Model2) と高校 3 年次要因 (Model3) のそれぞれで予測してみよう。Model2 で統計的に有意な変数は、父短大・専各卒 ($p<.01$)、父大学卒 ($p<.001$)、中 3 次大学希望 ($p<.001$)、中 3 次成績 ($p<.001$) で、性別や父学歴をコントロールしても、中 3 時点で大学進学を希望しており、成績が高い生徒ほど、高 3 時点でも大学進学を希望していることがわかる。

Model3 で統計的に有意な要因は、父短大・専各卒 ($p<.05$)、父大学卒 ($p<.001$)、進学校に所属 ($p<.001$)、高 3 次成績 ($p<.001$) である。性別や父学歴をコントロールしても、所属トラックや高校での成績が高 3 時点での希望最終学歴を規定しているといえる。

次に、Model1 との比較から Model2 と Model3 の擬似決定係数 (Nagelkerke R2) の変化を確認しよう。中 3 次要因から高 3 次希望最終学歴を予測した Model2 は、Model1 と比べると Nagelkerke R2 が 0.293 増加している。一方で、所属トラックと高 3 次成績で高 3 次希望最終学歴を予測した Model3 は、Model1 と比べると Nagelkerke R2 が 0.332 へ増加しており、Model1 から Model2 への変化と比較すると、わずかながら Model3 の方がモデルのあたりが良いことがわかる (尤度比検定の結果は、 $p<.001$)。

Model4 は、Model1 に中 3 次希望最終学歴、中 3 次成績、所属トラック、高 3 次成績の 4 つの変数を加え、中 3 次要因と高 3 次要因をそれぞれコントロールしたモデルである。有意な変数は、父短大・専各卒 ($p<.05$)、父大学卒 ($p<.001$)、中 3 次大学希望 ($p<.001$)、進学校に所属 ($p<.001$)、高 3 次成績 ($p<.01$) であり、中 3 次成績は有意ではない。中 3 次成績はトラックに割り振られるまでは重要な変数であるが、所属トラックをコントロールすると、高 3 次希望最終学歴には有意な効果をもたないといえる。

さらに、Exp(B)を見ると、中 3 次の大学進学希望は 4.432 だが、進学校のそれは 15.832 にも及ぶ。中 3 次に大学進学を希望していた生徒が高 3 次でも大学進学を希望する確率の

表 4. 高 3 次希望最終学歴の規定要因 (大学希望=1 としたロジスティック回帰分析)

	Model1		Model2		Model3		Model4	
	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)
性別 (ref:女子)								
男子	0.339	1.404	0.105	1.110	0.481	1.617	0.356	1.428
父学歴 (ref:中学・高校卒)								
短大・専各卒	0.867	2.379 **	0.957	2.603 **	0.874	2.396 *	0.940	2.561 *
大学卒	2.360	10.593 ***	1.860	6.422 ***	1.656	5.237 ***	1.370	3.936 ***
学歴不明	0.291	1.338	0.629	1.876 *	0.362	1.436	0.467	1.595
中3次希望最終学歴 (ref:非大学希望)								
大学希望	—		1.671	5.315 ***	—		1.489	4.432 ***
中3次成績	—		0.886	2.425 ***	—		0.165	1.180
所属トラック (ref:普通科校)								
専門校	—		—		0.441	1.554	0.260	1.296
進学校	—		—		3.454	31.623 ***	2.762	15.832 ***
高3次成績	—		—		0.378	1.460 ***	0.366	1.442 **
定数	- 1.075	0.341 ***	- 4.633	0.010 ***	- 3.528	0.029 ***	- 4.335	0.013 ***
- 2 対数尤度	608.619		448.442		422.560		388.404	
χ^2 (d.f.)	101.798 (4) ***		261.975 (6) ***		287.857 (7) ***		322.013 (9) ***	
Nagelkerke R2	0.239		0.532		0.572		0.621	
尤度比検定	—		M1 vs. M2 ***		M1 vs. M3 ***		M3 vs. M4 ***	
N	517		517		517		517	

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$
(JELS)

オッズは約 4.4 倍に留まるが、進学校に所属する生徒は、普通科校の生徒の対比において大学進学希望になる確率のオッズが約 15.8 倍になり、他の変数と比べても所属トラックが進路選択に与える影響が強い。

以上の分析より、所属トラックをコントロールしても中 3 次の希望最終学歴は独立した効果を継続させているが、所属トラック参入以前の要因とは独立した強い効果を持つことが明らかになった。

5. 結果と考察

本稿では、パネルデータの分析から、青少年のアスピレーション形成のメカニズムを明らかにすることを目的としてきた。従来の研究は、①回顧的に得られたデータから青少年の希望進路の変化を分析してきたこと（荻谷 1983; 中村 2002）、②中学・高校と学校段階をまたいだパネルデータによって分析されてこなかった（耳塚 1986; 藤原 2010）というデータ上の課題が残されていた。そのため、トラッキングシステムが青少年のアスピレーションを変容させているのか否かが明確にされてこなかった。本稿では、中学 3 年生と高校 3 年生を対象に得られたパネルデータの分析し、それにより得られた結果は以下のように整理できる。

第一に、所属トラックは、中学 3 年次の希望最終学歴よりもその時期の成績（自己評価）が強い影響を持ち、中学生は希望進路によりトラックを「選択」するのではなく、成績によって「選抜」されている。

第二に、高校 3 年次の希望最終学歴と中 3 次の希望最終学歴には、トラッキングシステムとは独立した因果関係を持つことが明らかになった。

第三に、中 3 次の希望最終学歴をコントロールしても、高校 3 年次の希望最終学歴にとって、所属トラックは強い規定力を持つ。高校入学以前の学業成績や希望学歴とは独立して、トラッキングシステムが青少年のアスピレーションを変容させることが確認できた。

日本の高校は階層構造をなしており、各高校がトラックとして機能していると指摘されてきた（藤田 1980）。しかし、データの課題により、従来のトラッキング研究は、トラッキングが持つ進路分化機能を過大に評価してきた可能性があった。しかし、本稿では、中学生と高校生を追跡調査して得られたパネルデータを分析した結果、高 3 次の希望進路は、中 3 次の希望進路と関連しながらも、トラッキングシステムや高校での学業成績によっても規定されており、高校での要因が進路選択に与える独自の効果を明らかにすることができた。

それだけではない。中村（2002）は、日本型教育システムの特徴を「加熱進行 - 階層維持システム」と呼び、社会階層ごとに予め分化している希望進路の差異が教育システム内部で、分相応に徐々に加熱されると指摘する。本稿の分析でも、所属トラックや高 3 次の希望進路に対しても、社会階層の指標である父学歴が統計的に有意な影響を持ち続けたことから、中村（2002）の指摘する日本型教育システムの特徴が的を射ていることが示唆される。

とはいえ、本稿の課題には、脱落サンプルの問題がある。本稿で用いたのは、比較的に父親が高学歴で、中 3 次の学業成績も高い層のみが追跡可能だったデータだったため、階

層要因や中3次成績の推定値が過小に算出されている可能性がある。また、結果が地域的な特徴を反映している可能性もある。しかし、学校段階をまたいだパネルデータは極めて少ない。本稿では、社会的不平等を維持・拡大する日本型トラッキングシステムの独立した効果を実証的に明らかにすることができたという点で、学術的な貢献があるだろう。

付記

「青少年期から成人期への移行についての追跡的研究 Japan Education Longitudinal Study (JELS)」は、JSPS 科研費 19330185 および JSPS 科研費 21330190 (研究代表者：耳塚寛明)の助成を受けて行った共同研究の成果の一部である。データの利用について快諾いただいた研究会メンバーに記して感謝申し上げたい。

註

- (1) 紙幅の都合で分析結果は割愛するが、追跡調査が可能だった生徒の特長をより明確にするために、追跡者=1、脱落サンプル=0としてロジスティック回帰分析を行った。その結果、追跡可能だった生徒の傾向は、女子であり、父学歴が中学・高校卒との対比において短大・専各卒であり、中3次成績が高い生徒であった。
- (2) 分析の過程で学歴不明が統計的に有意であっても解釈は与えないこととする。
- (3) 本稿で操作的に定義した各トラック別の大学・大学院希望進路者の割合は、進学校=89.4%、普通科校=11.7%、専門校 21.2%である。なお、調査地域の専門高校では、非進学校の普通科高校よりも専門高校の方が、入学者学力・進学実績ともに高い。
- (4) 学業成績や進路選択が出身社会階層の影響を受け、またそのように形成された学力によってトラックへの選抜・配分がなされることはよく知られている(潮木他 1978 など)。紙幅の都合で分析を深めることはできないが、本データで父学歴と中3次希望進路と中3次成績の関連を分析した結果は、父親が高学歴なほど、大学・大学院までの進学を希望しており、また成績の自己評価も高く、先行研究と整合的な知見が得られた。
- (5) 性別の変数が負で統計的に有意であり、男子ほど進学校に所属していることがわかる。教育達成のジェンダー間格差は重要なテーマではあるが、本稿の目的とは異なるため、ここでは積極的に解釈を与えないこととする。

参考文献

- 天野郁夫, 1982, 『教育と選抜』第一法規。
- Cicourel, V. Aaron. and John I. Kitsuse, 1963, *The Educational Decision-Makers*, Indianapolis: Bobbs-Merrill.
(=1985, 山村賢明・瀬戸知也訳『誰が進学を決定するか』金子書房。)
- Collins, Randall, 1979, *The Credential Society: An Historical Sociology of Education and Stratification*, New York: Academic Press. (=1984, 大野雅敏・波平勇夫訳『資格社会——教育と階層の歴史社会学』有信堂高文社。)
- 藤原翔, 2010, 「進路多様校における進路希望の変容——学科、性別、成績、階層による進路分化は進むのか」中村高康編『進路選択の過程と構造——高校入学から卒業までの量的・質的アプローチ』ミネルヴァ書房, 44-73.
- , 2012, 「高校選択における相対的リスク回避仮説と学歴下降回避仮説の検証」『教育社会学

- 研究』91: 29-49.
- 藤田英典, 1980, 「進路選択のメカニズム」天野郁夫・山村健編『青年期の進路選択』有斐閣, 105-29.
- 学校社会学研究会, 1983, 『受験体制をめぐる意識と行動——現代の学校文化に関する実証的研究』伊藤忠記念財団.
- 岩木秀夫・耳塚寛明編, 1983, 『現代のエスプリ——高校生：学校格差の中で』至文堂.
- 荻谷剛彦, 1983, 「学校格差と生徒の進路形成」岩木秀夫・耳塚寛明編『現代のエスプリ——高校生：学校格差の中で』至文堂, 69-78.
- , 1986 「閉ざされた将来像——教育選抜の可視性と中学生の『自己選抜』」『教育社会学研究』41: 95-109.
- 北村行伸, 2005, 『パネルデータの分析』岩波書店.
- Lauder, Hugh, Phillip Brown, Jo-Anne Dillabough, and A. H. Halsey eds., 2006, *Education, Globalization, and Social Change*, Oxford: Oxford University press. (=2012, 広田照幸・吉田文・本田由紀編訳, 『グローバル化・社会変動と教育 1——市場と労働の教育社会学』、荻谷剛彦・志水宏吉・小玉重夫編訳『グローバル化・社会変動と教育 2——文化と不平等の教育社会学』東京大学出版会.)
- Lucas, Samuel R., 2001, “Effectively Maintained Inequality: Education Transitions, Track Mobility, and Social Background Effects,” *American Journal of Sociology* 106(6): 1642-90.
- 中村高康, 2002, 「教育アスピレーションの加熱・冷却」中村高康・藤田武志・有田伸編『学歴・選抜・学校の比較社会学——教育からみる日本と韓国』東洋館出版社, 73-89.
- , 2010, 「四大シフト現象の分析」中村高康編『進路選択の過程と構造——高校入学から卒業までの量的・質的アプローチ』ミネルヴァ書房, 163-83.
- 中西祐子・中村高康・大内裕和, 1997, 「戦後日本の高校間格差成立過程と社会階層——1985年SSM調査データの分析を通じて」『教育社会学研究』60: 61-82.
- 耳塚寛明, 1986, 「中学校における教育選抜過程——成績の自己評価と進路展望に関する追跡的研究」『国立教育研究所研究集録』13: 1-18.
- , 2000, 「進路選択の構造と変容」樋田大二郎・耳塚寛明・荻谷剛彦・岩木秀夫編『高校生文化と進路形成の変容』学事出版, 65-82.
- Meyer, John W., 1986. “Types of Explanation in the Sociology of Education,” John G. Richardson eds., *Handbook of Theory and Research in the Sociology of Education*, New York: Greenwood Press, 341-359
- Oakes, Jeannie, 1985, *Keeping Track: How Schools Structure Inequality*, New Haven: Yale University Press.
- Rosenbaum, James, 1976, *Making Inequality: The Hidden Curriculum of High School Tracking*, New York: Wiley-Interscience.
- 竹内洋, 1995, 「学校効果というトートロジー」竹内洋・徳岡秀雄編『教育現象の社会学』世界思想社, 2-18.
- 潮木守一・藤田英典・秦政春・佐藤智美・滝充, 1978, 「教育意識の構造に関する事例研究」『名古屋大学教育学部紀要』25: 167-230.
- 山口一男, 2004, 「パネルデータの長所とその分析方法——常識の誤りについて」『家計経済研究』62: 50-58.